コメント２

大塚直樹（亜細亜大学）

上田：それでは、続きまして、亜細亜大学の大塚先生のほうからコメントをお願いしたいと思います。

大塚：ただ今、ご紹介にあずかりました、亜細亜大学の大塚と申します。

お二方の第一人者である先生方に対して、コメントをできるような立場にはないのですけれども、この海域学プロジェクトのメンバーの中で、地理学を名乗っているのが私だけということが理由かと思い、今回のコメンテーターをお引き受けいたしました。また、私も東南アジア研究者として、最近ようやく外邦図を研究の中で取り入れ始めましたので、その紹介も含めてお話をしていきたいと考えております。

最初に、せっかく第一人者の両先生に来ていただいておりますので、前から私のほうがぜひ聞いてみたいと思っていたことがあります。それを質問させてもらった後に、私なりの外邦図の使い方、ないし、これからの利用可能性について、4つほどお話しさせていただければと考えております。

私は地理学ということで研究を進めておりますが、どちらかというとベトナムの地域のほうに傾倒して研究をしております。ですので、地図学というよりは、ベトナム側から見たときに、外邦図をどのように捉えられるのかという点に興味を持っていて、そういう使い方を今、しております。その意味で、ぜひお聞きしたいところがあります。例えば、仏領インドシナでは、外邦図や水路図（海図）が作製されました。これらは、当時、一体どうやって使われていたのか、もし何かご存じのことがあれば、ぜひお聞かせ願いたいと思います。

先ほど、小林先生のほうから、仏領インドシナの外邦図に関してはグラード表記で、パリ子午線を基準にしたというお話が出ておりまして、先生のご著書にもその記述がされておりました。この点について、日本軍は、当時、グラード表記ということを理解した上で地図を作製していたのか、なども私の中では疑問に思ったりしております。

別の例として、仏印進駐があります。実際に日本軍が仏印進駐したときに、例えば、（現在、立教大学が所蔵しているような）ベトナムのサイゴン周辺の水路図が使われていたのか、なども可能ならお聞かせください。

次に、私のほうでどういう形で外邦図を使っているか、ないし使い始めたかというという点をお話しいたしと思います。私は、ベトナムでフィールドワークをしておりますが、先ほど小林先生のほうから戦争目的で利用するには10万分の1の縮尺ではなく、5万とか、2万5,000分の1でないと用途を果たさないのではないか、という話がありました。同じように、実際、フィールドワークをする場合に、2万5,000分の1でも縮尺が小さい。1万分の1ぐらいでないと、フィールドワークの中では使えないというのが現状です。

しかし現存の仏領インドシナ外邦図には、1万分の1の縮尺の地図が、私の知る限り、存在しません。そうした環境下で、どういう使い方をしているかですけれども、一つ目が全体像の把握ということになります。例えば、ベトナム南部の外邦図をみると、その中に黒い線があるのを確認できます。これは、その後廃止されてしまうサイゴンーミトー鉄道になります。こうした地図は、特に歴史地理学でアプローチするときには、研究の導入に使えるかと考えております。あと例えば、メコンデルタの50万分の1の外邦図4枚をトリミングして組み合わせ、メコンデルタの全体像を地図化して、全体像の把握に役立てています。ただ、こうした外邦図の使用は、外邦図の研究という着眼点からはそれてしまいます。

次の使い方について、歴史的地名を読み取ることがあげられます。例えば、ベトナム中部の外邦図には、フェイフォ（Faifo）という地名が存在しますが、ここは現在のホイアンです。ここから、何が分かるかといいますと、地図（外邦図）に対する当時の日本軍の認識が読み取れます。フェイフォというのは欧米からの呼び名であって、ベトナム側の呼び名ではありません。フランスからの地図を接収した上で日本軍が地図を作製していたという事情もあるとは思いますが、実際に調査すれば、ホイアンという地名が出てきたはずです。しかし、日本軍は、それをせずに、まさに欧米の視点から地図を作っていた。この辺の地名、先ほど舛谷先生のお話にもありましたけれども、こういった地名を拾っていく、つまりベトナムの外邦図の地名を拾っていくことで、何か見えてくるものがあるかと考えております。

三つ目ですけれども、これは先ほど来のお話も出ていました。例えば外邦図の製作年についてです。例えば昭和15年に製版された仏領インドシナの外邦図があります。つまり、1940年の時点ですでに仏領インドシナの外邦図はつくられていました。仏印進駐とほぼ同時期に作製されていたことになります。また、経緯がよく分からないのですが、例えばホイアンでは、50万分の1の地図が1940年に作られていて、40万分の1の地図が1945年に製版されています。こういったいわゆる地図内の周辺情報、ベトナムに関する地図の周辺情報を集め、それを仏印進駐の歴史と摺り合わせをしたいと思っています。地図の周辺というか、要するに地図の中だけではなくて、周りに書かれていることを少し分析してみると、どうなるだろうかという視点です。例をあげれば、外邦図によっては「1937年の仏領インドシナの地理局製版の50万分の1の地図を3色刷りしたものである」という情報も明記されています。ですので、そういった情報も含めて、ベトナムという場所から整理をしてみると、何かできないのかと考えているところです。これが3点目です。周辺、周辺というのは地図の周りの情報をどう読むかというところです。

ここまではベトナムの話ですけれども、最後、四つ目は半ば妄想というか、まだまったく手つかずのことです。ただ、これはもしかしたら既にどこかされているのかもしれないですし、私が知らないだけかもしれないです。民族学博物館に松尾三憲（みのり）さんという方の絵はがき等のアーカイブがあります。私は、このコレクションについて詳しくなくて、たまたま一つの例として知っているものを出しただけなのですが、例えば、こういった当時の絵はがきの情報の中に、もし位置を特定できるようなものがあるのであれば、デジタルの絵はがきや写真と、外邦図を組み合わせたりすることで、デジタルアーカイブの何かの形としてできたら面白いかと思っております。こういう形で既にデジタル化されている絵はがきとか写真のようなものと、外邦図の位置関係というのも組み合わせてみると、何か見えてこないのか、見えてきたら面白いのかなというように思っております。

私のほうからは以上とさせていただきます。

上田：どうもありがとうございます。後半の部分ということで、今井さんの報告と大塚さんのコメントをいただきました。ちょっとまず事実確認などをして、先ほど大塚さんのほうから提案、幾つか大きな提言や質問、例えば外邦図なり、海路図、水路図、機密海図というものが、具体的にどういうふうに使われていたのか等の問題点については、ディスカッションのところで議論をさせていただきたいと思いますが、何か具体的な事実確認等で確認したいことがあればおねがいします。

フロアA：ちょっと確認をさせていただきたいのですが、外邦図には昭和15年製版のものと、仏領インドシナの地理局の製造に基づいてつくられた地図があるということでした。その昭和15年製版というところの意味は、元来フランス側が製造して、発行したものを日本語に訳したという可能性はありませんか。全て、要するに外邦図は日本が、大本営が

作ったものが昭和何々製造発行であり、そして原簿がフランス地理局製造という、そういうふうに峻別されているんでしょうか。

大塚：ありがとうございます。すいません、私の説明の仕方が悪かったです。少なくとも、私が確認している外邦図を見る範囲において、例えば、先ほどの外邦図を例にとると、フランス植民地政府が作製したのが1937年で、昭和15年に日本の陸地測量部ないし陸軍本部が作ったないし、単に複製したという理解をしております。

フロアA：そうすると、陸軍測量部がやったという、その主語の部分が表示があるわけですか。

大塚：そうですね。どう読むかもありますが、先ほど例に挙げた地図ですと、左上に昭和15年という製版年が出てきていて、左下に陸軍陸地測量部、あるいは参謀本部と書かれています。そして右側のところに製版、元になった地図は1937年に作製と書かれています。ここから原図が37年につくられて、日本軍が出したのが昭和15年と読めるのかなと私は理解をしています。

フロアA：分かりました。了解しました。ありがとうございました。

外邦図と水路図